

人生百年時代，超スマート社会 を楽しむ秘訣



若宮正子 | NPO ブロードバンドスクール 理事

1935年東京生まれ。1954年筑波大学付属高等学校卒業。同年三菱銀行(現三菱UFJ銀行)入社。1997年同行定年退職。定年直前パソコンを購入。ネット上の老人クラブ「メロウ倶楽部」に入会。2017年iPhoneアプリ「hinadan」を公開。2018年国連社会開発委員会で基調講演を行う。メロウ倶楽部副会長。NPOブロードバンドスクール協会理事。2019年ソフトウェアジャパンアワード受賞。



インタビュー：中野美由紀 (正会員) | 津田塾大学

東京大学理学部情報科学科卒業。博士(情報理工学)。富士通(株)、東京大学生産技術研究所助手、助教、特任准教授を経て、2013年から芝浦工業大学特任教授。2016年から産業技術大学院大学教授。現在、津田塾大学教授。データ工学、データベースとビッグデータの研究に従事。IEEE、ACM、電子情報通信学会、日本データベース学会各会員。

2019年2月5日 学術総合センターにて

2月号(Vol.60 No.2)の巻頭コラム^{☆1}にも登場いただいた若宮様に、人生百年時代に超スマート社会を楽しむため、ご自身の愉快で挑戦的な体験談、経験に基づいた人生の秘訣、そして、ユーザー目線から情報技術者、研究者への温かいコメントを頂戴いたしました。2019年ソフトウェアジャパンアワードを受賞された日にインタビューを行い、大変面白いお話で時間がたつのを忘れるほどでした。

苦勞したパソコン通信時代から

中野：情報処理学会では男女を問わず情報技術者、研究者が豊かな生活を送るためにInfo-WorkPlace委

員会を立ち上げております。私が代表して、高齢少子化にして超スマート社会へ移行しつつある現状の、IT界における後期高齢者ロールモデルとして若宮様に率直なご意見、お話を伺わせていただきたいと思っております。簡単に自己紹介からお願いいたします。

若宮：私は高校を卒業して銀行に勤めておまして、定年というときに、ネットにつながると家にいても友だちとチャットできるという話を本で読み、面白いぞと思いました。まだパソコンは普通の人は使わない時代だったのですけれど、早速買ってしまったのね。当時はパソコン通信の時代でした。買ったのはいいけれども、どうやって接続していいかわからない。電気屋さんや、メーカーさんに教えてもらい、モデムを別に買わないといけないことが分かった。それでモデムを買ったら、今度はモデムのために、といろいろとありましたね。

☆1 「デジタル機器、誰もが買った日から使える機器であってほしい」、
<https://www.ipsj.or.jp/magazine/9faeag000000pfzm-att/IPSJ-MGN600202.pdf>

中野：ケーブルを繋いだり、パソコンにセットしたり等ですね。

若宮：3カ月かかって繋がりました。今度はキーボードです。英文のタイプライタは触ったことがあるのですが、パソコンのキーボードを押すと、同じキーがひらがなの「あ」になったり、アルファベットの「A」になるのが不思議なものだと思いつつ、何とかなるだろうと。早速、パソコン通信のメロウ倶楽部の前身の「エフメロウ」に入りました。その先輩にどういふパソコンの使い方をしておられるのですか、と呆れ果てられました（笑）。

中野：同じような年齢の仲間の中に入って、そこでいろいろ学ばれたのですね。

若宮：そうです。IT関係の方以外にも、さまざまな経験をされた高齢者が集まっていますから、叱られたり、教えてもらったり、そして、親しくしていた方が病気になったり、亡くなられたりする。パソコン通信のコミュニティでありながら、社会の縮図のようですか、そういうのも学ばせていただきました。

情報処理学会とは長いお付き合いです

若宮：ちょうど2000年にそのメロウ倶楽部に情報処理学会さんから、イベントがあるから、高齢者の代表で、情報技術の利用について議論しないかとご

提案がありました。最初、しかるべき人が行くことになったのですが、マーちゃんなんか行かせると面白いんじゃないと提案されまして、結局、私が行くことになりました。今回、2月号の巻頭コラムのところにもURL^{☆2}を書かせていただいています。

中野：私も拝見しました。初心者に使にくいということでパソコンの写真まで入れて解説され、使いやすさを考えてくださいと技術者の方へ呼びかけていらっしやいますよね。

若宮：20年前にしては、きちんと調べて、まともにレポートも書き、自分なりにまとめたつもりです。あのときからデジタル機器がシニアに使にくいというお話、一貫してずっとそんなことをやっていますね。

中野：どうですか、この20年で変わりましたか。

若宮：使い勝手は良くなっているのですが、どんどん新しい機器が出たり、バージョンが変わったりで、追いつけない。年寄りには新しいものを好まない方も多く、こちらの方が楽だと言っても、いや、昨日までやっていた方がいいなど、その辺が難しいところですよ。

メロウ倶楽部ではデジタル機器やサービスの使い勝手の議論を中心にかかわっていました。ブロードバンドスクール協会では、ハイシニアでまだまだあまり

☆2 情報処理学会/パネル討論出席報告, <http://www.mellow-club.org/archives/joho/index.htm>



左：若宮正子氏 右：インタビュー 中野美由紀氏

Interview 若宮正子氏インタビュー

デジタル機器を使っていらっしゃらない方のご相談に乗ったり、駆け込み寺と称しまして、デジタル機器が思うように動いてくれず困っている方への支援をしています。その中で、スマホというのは何かと使いにくいと話題になります。ある地域のパソコンクラブの会長さんはITリテラシーはきわめて高いのに、それでもiPadでこれができないんです（笑って指を動かす）。

中野:指で、タップしたり、拡大、縮小の操作ですね。

「スマホの使いにくさを解決したい」 がアプリ開発の動機

若宮:年寄りの男性は指での操作が苦手なのです。生理的な問題で、ことに冬、指が乾燥すると反応しない、使いにくいということになってしまいます。その上、年寄りが面白そうな、使いたいアプリが何もない。スマホを使いやすくと言われても、技術者ではないので簡単にはできません。でも、アプリならだれかに作ってもらえるのではと思いつきました。年寄りが喜びそうなものを作ってよとお願いしたら、僕は年寄りがどんなものが好きか分かりませんよ、ご自分で作ってはどうですかと言われてました。それで、私が自分なりのフローチャートを書いていたなら、そこまでできているのなら作ればいいじゃないですか。分からないところがあったら僕が教えますよとおっしゃってくださった。その方は宮城県の塩釜に在住なので、スカイプやメッセージを使って遠隔授業でファイルを共有して教えていただいたのですよね。

中野:遠隔授業とはすでに時代の先端ですね。ところで、フローチャートを描かれたとき、お雛さまにするとどう決めていたのですか。

若宮:もう決めていました。ブロードバンドスクール協会というのは年に1回、電腦ひな祭りをやっております。介護や体が不自由等で外出できない方も雛祭りを楽しくをモットーに、たとえば、仙台の

お雛祭りはこんな感じですかネット上で意見交換していました。ですから、お雛さまを正しい並び順に並べるゲームにすることは考えていました。

中野:米沢はこんなだとか。

若宮:そうなのです。熊本のお雛さまはこうだとか、日本全国で情報共有できます。ただ、お菓子の味は共有できず、あんな美味しそうなものを食べているというだけです。そのときから、お雛様アプリのようなものをご紹介できたら面白いなと作りました。

そうしたら、ご指南くださった方が、新聞社の友だちに、変なばあさんがいて、遠隔指導でプログラミングを教えている話をされました（笑）。そして、新聞の方が会いに見えられて、いつの間にか、その変なばあさん自体に焦点が移ってしまいました。アプリを公開したら教えてくださいとおっしゃってくださいました。

インターネット時代の情報は 世界をめぐる

若宮:どうにか、3月3日に間に合うようにアプリがApple社の審査に通って公開されました。朝日新聞が記事にしてくださり、その後CNNから、今夜5時までに質問票に対する回答をくれたら公開するというような英語の手紙がきたのです。今でも英語は駄目なので、Google翻訳の結果をべたっと貼り付けて返しました。

中野:素晴らしいですね、今どきのツールをちゃんと使えていらっしゃる（笑）。

若宮:返事を見て、CNNは、この人はきっと英語ができると思われたのですが、後でGoogle翻訳かと言われてしまいました（笑）。

返事を出したその日の夕方、CNNが拡散してくださり、プラウダとか、アルジャジーラとか、世界中の通信社でまたそれを拡散してくれたのです。

中野:ある意味、インターネットの情報流通の速さを体験されたのです。

若宮：高齢者問題というのはどこの国でも悩んでいるし、特に高齢者がIT嫌いだというのもどこの国も共通しているから、ニュースとしてたちまち地球を駆け巡ったのだと思います（笑）。

中野：高齢者にとってバリアがあるわけですね。ITを使うとか、言語対応等のバリアがあったけれども、でも、うまく乗り越えられたのですね。

若宮：そうですね。CNNに取り上げられた後、Apple社からメールがきて、日本のApple社の人と一緒にアメリカに行きましょうと誘われました。乗り気になれず、行けないと申し上げましたら、どうしてもあなたに会いたい人がいると。だれが会いたいとおっしゃっているのですかと聞いたら、CEOでございますと。そこまで言われて行かないのも悪いので、行きました。

中野：CEOにお目にかかってどうでした。

若宮：シリコンバレーというのはアメリカではないとみんなが言うのですけれども、確かにさまざまな方がいっぱいいらっしゃるなど感じました。CEOにお会いしたとき、挨拶だけすればいいのだと思いましたが、あなたのiPhoneを見ながらいろいろお話を伺いましょうとなりました。それで、あのゲームはフォントサイズが小さすぎるとか、なんか町のパソコン塾の先生が言いそうなコメントを頂戴いたしました（笑）。

中野：技術者はどうしても技術的な点を指摘したくなってしまうのかもしれないですね。

若宮：シニアのアクセシビリティというのか、16対9の画面は4対3の画面にした方がよいとか、下々が考えそうなことをおっしゃるのです。いっそ、iPadアプリでとおっしゃったので、iPadを持っている人は少ないので、iPhoneアプリにしたいと思っていますなど、大変身近にお話ができました。

中野：ユーザ目線に立ったお話で盛り上がったのですね。

若宮：おっしゃる通りです。シリコンバレーは今流行りのダイバーシティ教の総本山みたいですけど、

高齢者は話題になっていなかったようです。その中で、高齢者のばあさんがアプリを作れば高齢者のユーザも増えるかも分からない。今、若い人はスマホを全員持っていますから、シェア争いしかできないけれども、70歳以上だったら新しいマーケットが開けると思われたのかなという気がします。WWDC^{☆3}もちょっと見せていただいたりして帰ってきました。そうしたらにわか有名人になっておりました（笑）。

遊べることが重用

中野：アプリの評判はいかがでしたか。作成されたアプリは、全年齢が使える楽しさがあって、きれいなので女の子とか、小さな子も大好きそうですね。

若宮：素人には評判はいいのです。でも、あのプログラムを見た、プロのプログラマはみんな絶句です。まず、お人形、たとえばお内裏さまをタップし、ひな壇の中でお内裏さまが置かれるべき位置をタップします。正しかったらポンという音、間違っていたらブーという音を出すなどという一連の処理を書きました。あとそれを、11個、コピーして、下に貼り付けて、ファイル名だけ書き換えました。「配列」などという「お定まり」の処理方法を知らなかったからです。先生は、結局、若宮さんはプログラマになりたいわけじゃなく、人形が動けばいいんですよね、じゃあもうこれでいきましょうということになりました（笑）。

プログラムの体を成していないということで、Apple社から断られるかもしれませんがと言われたのですけれど、断られませんでした。

中野：アプリは使っている分には、中がどうなっているかなんて分かりませんものね。

若宮：楽屋裏のことは分からない。それでも、お年寄りの方は面白がってくださいました。あのゲームは手の動き方が遅くても少し震えていても勝てるの

^{☆3} Apple社が開催している開発者向けカンファレンス Worldwide Developers Conference

Interview 若宮正子氏インタビュー

ですよ。年寄りには並べ方を知っているでしょ。若い人は手が動くけど知らないから絶対に勝てない。12の席があって、12の人形があればいつかはできます。だけれども年寄りには知っていますからすぐできるのですよね。だから喜んでくださいました(笑)。

中野: いいですね。成功感が感じられると、もっとやろうと嬉しい気持ちになりますよね。

若宮: 私も経験があるので、スワイプなどは一切使いませんでした。また、年寄りの人はタップしろと書いても長押ししてしまいます。上から軽くトンと叩いてくださいとマニュアルには書きました。

中野: 私の母もスマホデビューで、トンと押すのができなくて、グーッと押して、ほかの機能が動いて困っていました。そこがこのアプリはうまくできているなと思っていたのですけれども、やはりご経験があったのですね。

若宮: そうですね。その後、Apple社は多言語化しなさいと言ってくださいました。多言語化の方法が分からなかったら、Apple社の日本語が分かる社員が教えるからと。それで、英語と中国語、中国は台湾のと北京のと両方作りました。今、韓国語も公開されております。

中野: ワールドワイドで遊ばれるようになって素晴らしいですね。

便利にするための工夫とは

中野: ITを社会に活かす工夫が求められています。



いかに自分の世界を便利にするかというあたり、いかがでしょうか。

若宮: そうだと思います。年寄りの困りごとで、何か作ってほしいものがあるかとよく聞かれます。ビジネスホテルに泊まって鍵を抜くと、全部の電気が消えますよね。どこを消したかと、お手洗いや戸棚から見て歩かなくてもいいでしょ。私は、自宅で応用できればいいなと思っています。消してよい電気器具、全部ではなくて冷蔵庫は切れてもらっては困る、や、ガスがちゃんと止まっているとか、水道がきちんと止まっているとかタッチ1回で確認したいです。マンションだと下の部屋の人に……。

中野: 迷惑がかかってしまいますよね。

若宮: 窓やドアの開けっ放し、鍵のかけ忘れ、お洗濯やお布団のしまい忘れとか、生活の総合チェック機能を作りたい。お出掛けする前に、チェックすると、窓が開いていますというのが出てくればいい。そういうものをAIスピーカを利用して作りたいと言いました。後期高齢者のためのサービス介護では管理人が大変です。サービス付き高齢者向け住宅であれば同じようにつくればいいし、それで管理人も楽になるし、もちろん自分たちも便利になります。火事にしても、煙探知機はありますが、もっと前の段階でチェックできるとか、防犯を呼びかけるよりも鍵が開いているのが分かるとか、外にセンサを付けて、侵入を知るとか、いろいろ考えられる話があると思います。

後期高齢者はロボットに寛容

若宮: これからはシニアの自立を考えたいと思っています。私の友だち、メロウ倶楽部の会員の人たちは、自分が要介護になったときに人間の介護人よりもロボットの方がいいとよく言うのです。たとえば、お手洗いの介助が必要なとき、1時間ぐらいでお願いすると、人間ならまたですかと言われるかもしれませんが、ロボットは、はいと言うだけです。

中野：さらに、喜んでお手伝いしますと。

若宮：ねえ、気兼ねないでしょ。気兼ねするから頭の中がそれでいっぱいになってしまいます。いつでも連れて行ってもらえると安心するなら、ほかに意識がまわるからほかのことができるようになるかも分からない。だからみんなロボット、賛成です。

中野：なるほど、それは一理ありますね。

若宮：私は今、総務省のインクルーシブ委員会のメンバーとして、共生社会を進めるお手伝いをさせていただいています。そこでも、高齢者の自立のために鍵一本やスマホ1つで総点検できるシステムが話題で、たとえば、AIスピーカーは口で言えばいいから、体が不自由でもいいわけですね。そうすると、リモコンの操作手順を知らなくてもいい。間違っても、それで壊れることもなく、申し訳ありません、お役に立てませんと言われるだけです。言い方を工夫すれば、だんだん学習してくれるから付き合いが良くなります。

中野：AIスピーカーが付いたロボットがそばに寄り添ってしてくれると暮らし良くなる感じでしょうか。

若宮：そうなのです。耳が遠いとかだったら、字にしてテレビに出す。テレビは抵抗感がないのです。情報をテレビに映し出してくれたら、耳は聞こえにくくてもいいのです。これからはいろいろな機器が出てきますから、ロボットを通じて利用できる方向がいいなと思っています。

中野：なるほどね。横で話しかけても、嫌とかは言わずに、黙って、はいとお手伝いしますみたいな感じの方がやはり気は楽だと（笑）。

若宮：そうですね（笑）。これがさまざまな場面で使えるようになったらいいですね。でも、さきほどのお部屋安全総合システムも含めて、実は共通課題があります。

人との連携を促す IT

中野：確かに、お部屋を全体に見るときにも。スマ

ホにつながるためにはカメラを付ける、この電気だけ消したいなど、ある程度のことはしなくてはいけないわけですね。繋ぐところをだれが担ってくれるか。

若宮：そうなのです。そのインクルーシブ委員会で、お助けマンというか、パソコンやインターネットの駆け込み寺を検討しています。情報介護といったらオーバーですけども、一般にケアマネさんはあまりITが得意ではないのですよね。そこで、ケアマネさんや地域包括センターの人から要請があれば、介護情報支援員みたいな方が行って、支援して下さる。

中野：ネットをどうつなげばいいから、月にどれくらい支払って、どこまでできるかとか、これぐらいの設備が使えるとかいうことをね。

若宮：初期設定して差し上げて、それでまた何か分からないことがあったら言ってくださいみたいな形ですね。技術者だった方で定年を迎えた方に介護情報支援員の役割を担っていただけると助かります。

中野：確かにそうですね、ぽんと置いたから動くわけではなくて、つないだり、設定とかありますからね。

若宮：そうなのです。お役所が、たとえば、iPadを被災地に何百台も配ったりするけれど、配っただけでは駄目です。何かインセンティブがないとと言っているのですが、もしなければ作ればいい。たとえば、市立図書館の本の予約をネットでやった人は3ポイント、粗大ごみの回収の申し込みもネットでやったら4ポイントというように、ポイントが貯まると地域お買い物券と換えてくれる。そういう長続きするためのインセンティブも作り出すのがいいのではないかという提案もしています。

中野：それは重要ですよ。最初のハードルを乗り越えるための、便利だとか、得があるとか、そして、その次は続けて使わないと駄目ですものね。

若宮：そうです。講習会に行ったときは使えるのに、帰ってから使わないでいると、分からなくなってしまう。自分の思うように動かなくなると神棚に上げ

Interview 若宮正子氏インタビュー

てしまったりするわけです。だから長続きがするインセンティブは必要です。

ユーザに合わせた使いやすさ

中野：あとは、より簡単ということでしょうか。どこかで分からなくなったとき、すぐに元に戻るボタンがあると便利ですよ。結構、皆さん苦労されますよね。

若宮：そうです。使いやすさというか、アクセシビリティを一貫して課題にしています。エクセルアーティストとして遊んで、面白がり屋で、出来損ないのYouTuberをやったりしていますけれど、情報処理学会の20年前のパネル討論のときからアクセシビリティは課題です。あのパネル討論のときにIBMの岩野和生さんが一生懸命メモを取っておられたことはいまだに印象に残っていますし、それから障害者代表で出ていらした和波孝禧（わなみたかよし）さんが。

中野：盲目のバイオリニストの方ですね。

若宮：和波さんとの打合せはメールでした。私は何にも予備知識なくて、どうやってメールでやるのかと思ったら、和波さんから長いメールがきました。僕は飛行機の中、真っ暗でもメールが打てるんですよ、と。長いメールだったのに間違ったところは1カ所しかなくて、私よりも打てると思って、感動しました。聴いておられたWebサイトにリンクが張ってあり、どうして気が付いたのかとおたずねしたら、平文は男の声が読み上げ、リンクに張ってあるところは女の声に変わる。

中野：なるほど、分かりやすいですね。

若宮：だから障害者向けのツールも、これまでいろいろ進歩してきました。当時、IBMのアクセシビリティの研究者の方が、先駆的なユーザは子どもと年寄りから出てくるとおっしゃいました。なぜなら、学校で教えるようになると、独創的なアイデアが潰されてしまう。会社のコンピュータはルールには

ずれて使うと叱られる。名前は右上に打つなど会社の統一基準に従うことが求められ、こういうふうに打たないと叱られる。そこからは先駆的なユーザは出てこない。それで会社をやめて自由の身になった人や学校に行く前の子がいいと言われました。それも1つの自己暗示になっていますね。ああ、私は楽しんでもいいんだわみたいに。

中野：素晴らしいですね。本当に先駆的なことは、知っているがために陥ってしまう罠、思い込みで陥らなく見つけなければいけないのですね。

周囲の支援を糧に

若宮：私に何か思いつくと、まわりに友だちがいて、皆さん手伝ってくれるのです。園遊会に呼ばれたら、ドレスコードに従えば、貸衣装屋でそれなりのものを貸してもらい、着付けもメイクもしてもらえます。でも、一生に一回だし、陛下も代わられるから、自分でつくった洋服を着ていくことにしました。エクセルのデザインで布地に印刷して作り、ハンドバッグは電子工作でアイロンビーズのところからLEDを出して、ピカピカ光らせました。そしたら、皇后陛下が面白がってくださって（笑）、一生懸命触って見ていらっしゃる。とても嬉しそうにしておられて、皇族の方も面白いと思われた。

中野：何百人というほとんどの方が同じ格好をされたり、似たものを持っていらっしゃったりしているときに、1人違ったらすごく気になりますものね。

若宮：そのときも、アキバのお店のお兄さんたちが夢中になってしまい、いろいろアイデアを出してくださる。単三の電池を2本入れると重過ぎないとか、ピカピカするだけでは、単純ではつまらないとか。ふわっと明るくなって、ふーっと消える。その方がいいと。そんな難しいのは書けないと言ったら、もうひったくって作ってくれました（笑）。

中野：まわりに助けてくださる方がたくさんいらっしゃるのですね。

若宮：そうですね。洋服を縫ってくださった方とか、いろんな方が私の夢を叶えるために一緒に手伝ってくださる。そして、手伝ってくださる方もなんか自分がつくった洋服で出てくれるというのは嬉しいとか、皇后陛下が触ってハンドバックに触れてくださったとか（笑）。

だから皆さんが喜んで応援してくださるので幸せだと思います。

出会いは今どきです

中野：お手伝いして下さる仲間の方たちはどんな感じで出会われたのですか。やはりブロードバンドスクール等で出会われたのでしょうか。

若宮：1つは、Facebookのおともだちが2,300人なのです。一番増えたときは、TEDxTokyo（テデスクストーキョー）のエクセルアートの話だったのですけれども、ひと晩で100人ぐらいおともだちができました。

中野：それでそのおともだちがオフライン的にお手伝いをされる。

若宮：そうなのですね。ニューヨークの国連にスピーチに行ったとき、大変寒かった。80歳代のマーちゃんを1人でニューヨークの零下17℃なんていうところに行かせるなんて許せない、宿を借りてくださり、交代で泊まりにきてくださった。

中野：本当にお友だち冥利に尽きますね。それを自



然と実行される皆さんもたぶんそれでネットワークが広げられてまた違うところが見えていらっしゃるのかもしれないですね。

若宮：そうおっしゃるのですよね。それに、文藝春秋とか、週刊朝日の雑誌でも、シニアの特集の記事は、お葬式と、遺産相続等の話ばかりでしょ。

中野：健康食品と、いかに呆けないかとかね、そんな内容が多いですよ。

若宮：そういう意味でも、楽しく飛び回っているおばあさんの話はウェルカムなのです。意外と50代、60代の人の方が熱心なのですよ。もう70を過ぎた、後期高齢者は付き合いきれないからいいとおっしゃります。

後期高齢者のロールモデルとして活躍

中野：後期高齢者の方は私は見て応援しているわ、みたいな感じでしょうか。

50代、60代では、日本の社会の定年ラインに向けて、セカンドライフに対して不安を持ち、何をすればいいかを探していらっしゃる方が多いのかもしれないですね。

若宮：百歳まで生きるのが不安だと。年金や健康を考えると、将来にいいイメージを持っていらっしゃらない。そして、マーちゃんみたいな老後を送りたいと言ってくる。私自身も有名人になる前も充実してはいましたけれども、その後もさらに、人生いいほうに変わっています。まあ、そういうこともあるのですね。

中野：素敵ですよ。今は掲示板でセカンドライフを始めて、次のサードライフに入ったみたいな感じでしょうか。

若宮：そうなのです。だから、講演会に行って、講演料をいただいて、どうやって使っていいかわからない。年金をいただいているから三度のご飯を食べるのには困らない。それでメロウ倶楽部とブロードバンドスクール協会に寄付しました。私を育ててく

Interview 若宮正子氏インタビュー

れた大学はメロウ倶楽部なので母校に寄付するみたいなもので。

中野:メロウ倶楽部も、今も活動はされていらっしゃるのですか。

若宮:ええ、そうです。パソコン通信から独立したときの、設立発起人の1人なのです。サービスが明日から終了と言われ、老々の身なのに、自前でやろうということになりました。足腰が弱っても構わないようにといろいろ工夫しました。年次総会はネット上で完全に完結、議案を提示して、質疑応答とかあって、それで全部終わる。投票も全部ネットです。投票すると、本総会は成立しましたというのが出て、地べたに事務所もいらないようにしました。

中野:この仕組みがあるから、運営者がもし病気になられたとしても、ほかの方が代わりにと自然に続けていかれるのかもしれないですね。

若宮:幹事会と呼んでいますが、365日、開いているわけですね。自分の意見を書いて、緊急があったときだけ知らせる。それは急いで書かなくてはいけません。そうでないときは自分の都合のいい時間に書けばいいので、理事会もやらなくても済みます。

さらに、年に1回はオフ会をやるのです。そのときは、車椅子の人はなかなか来れないので、生中継をします。今、だれが踊りを踊って、だれが手品をやっていますというのをみんな見られるようにしています。

中野:オフライン的な付き合いも、オンライン的な付き合いも、人とコミュニケーションをとるという意味ではさまざまなかたちがあるから、その人に適したものを選ぶ、そういう選択肢が増えるというのはいいことですね。高齢者にとっても、オンライン、オフラインを含めて選択肢が広がるような時代になったというのはすごくいいことですね。

若宮:いいことだと思います。ただ、オンラインに年寄りが寄りつかない理由は2つあると思うのです。1つは、私たちが若いころはコンピューターームは重役室に冷房を入れない先から冷房を入れ、重

役よりも偉いんだと、特別恐れ多い存在だと思っていたので、今でもビビってしまうのです。2つ目は、メディアの人が何かと悪口を言う、と語弊があるかもしれませんが、副作用の方ばかり強調されるので怖いと感じてしまいます。

中野:Webは怖いぞみたいな。人間の根本にあるのは、スマホも含めたツールを使うための知的な好奇心をどのように持つかという話ですから、ツールが変わっても、あまり心配されることではないと思うのですけれどもね。

情報処理学会へのご意見を

中野:巻頭コラムですぐに使える機器であってほしいということを書いてくださったのですけれども、情報処理学会のメンバに向けて、こんなことに気が付いてほしいとか、人生百年時代の情報技術で、感じていらっしゃるものがあったら最後にまとめていただけますでしょうか。

若宮:これはITとは関係がないのかもしれませんが、若い世代と年寄りとが対等で交流する機会がないですね。同世代でばかり付き合って、お互いに「年寄りが何が面白いのか僕らは分かりませんよ」、「若い人の作る物は」ということになってしまいます。たとえば、異世代と一緒にコラボして、何かを作るワークショップなどがあるとよいと思います。

そういう機会を増やし、実際に使い、たとえば、具体的な部屋を作って、試してみただけならばと思います。そもそもアンケートでも、あなたの年齢の欄には、10代、20代、30代、40代、50代までで、あとは60歳以上、となっている。我が国で、60歳以上が人口の何割か、そこに気づいてほしいですね(笑)。

中野:名残惜しくはありますが、時間がまいりました。今日はお忙しい中いろいろ楽しいお話をありがとうございました。これからも、忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。